

札幌大学の倉島先生から今年のインカレの総括が送られてきましたので掲載します。全日本U18の女子メンバーは過日行われたアジア大会で優勝し着実に日本の強化が成功していることを証明したところです。

大学の勢力図も今までのように名前で勝てる時代ではなくなっているようで、戦国時代に入ったと言っていいでしょう。無名の大学に若いコーチが起用されはじめているのでそのうち成果が出てくるものと思っています。

さて、今年のインカレは倉島先生の分析ではどうだったのでしょうか。

### 平成 20 年度インカレ (総評)

倉 島 武 徳

今年のインカレは 60 回記念大会であった。今年度から「日本学生バスケットボール連盟」から「全日本大学バスケットボール連盟」と連盟の名称変更が行われ、インカレの名称も「全日本大学バスケットボール選手権大会」特に今大会は「第 60 回全日本大学バスケットボール選手権記念大会」と銘打って開催された。

この記念すべき大会の開会式には全国の学連から 47 名の功労者表彰が行われ、北海道からは亀田恵禧と倉島武徳が推挙され授賞した。

さて、この大会の概要を一言で説明すると「波乱の大会」と言えるだろう。まず男子から見ると、準優勝の国士舘大学は関東 11 位で大健闘である。関東 2 部のチームが準優勝したのは多分初めてのことだろう。関東 5 位の法政大・関東 4 位の日本大学を破り、さらに準決勝では関東 1 位で昨年の覇者である青山学院大学を撃破し、決勝では力尽きて慶応義塾大学の前に涙を飲んだが、リーグ戦では延長戦の激闘をした相手であった。

一方、青山学院大学は準々決勝で関東 12 位の明治大学に最後の最後まで粘られて、僅か 1 ゴール差で勝利を得たが、このあたりに不安定さが見られ、準決勝では国士舘大学にインサイドプレーを封じられ、苦杯を喫したのである。

反対サイドでは関東 2 位の東海大学が大学が関西 2 位の天理大学に、関東 6 位の中央大学が東海 2 位の愛知学泉大学に、関東 10 位の大東文化大学が九州 1 位の鹿屋体育大学に敗れるなど、関東の低迷が露わになった。

次に女子については、関東 3 位の拓殖大学の優勝は順当な所だろう。攻守にバランスの取れた、メンバーにも恵まれた好チームであった。準優勝の関西 1 位の大阪体育大学は、着実なプレーをする選手と 3 ポイントシュートのスペシャリストを組み合わせた、相手にしたくない大変厄介なチームであった。拓殖大学は準々決勝で関東 1 位の筑波大学と対戦したが、これが一つの山であっただろう。両チームとも立ち上がりシュートが決らず、ロースコアで終始したが、筑波大学はインサイドでの点が取れず、かなりフラストレシヨ

ンの溜まるゲーム展開となったのに対し、拓殖大学は森を中心に激しいディフェンスで相手を圧倒した。その他目ぼしいチームは、関西 2 位の武庫川女子大学、九州 1 位の鹿屋体育大学、東北 1 位の山形大学、関東 2 位の日本女子体育大学、東海 1 位の愛知学泉大学などの常連チームが活躍した。特に、山形大学・鹿屋体育大学はこの数年ベスト 8 に入る活躍を続けている。一方、男女とも日本体育大学の低迷には淋しさを感じざるを得ない。

ところで、北海道男子の札幌大学も北海学園大学もゲーム運びに圧倒的な差があり、1 ゲームをとおしてコンスタントに力を発揮できないのが実体である。同様のことは女子にも言える。選手の質の問題もあるが、何と云っても経験不足が大きいだろう。これを克服するのは、数多く関東方面のチームと腕試しをする必要があるだろう。道内のリーグ戦では、着実に底上げが行われているが、逆に上位チームが成長していないのが気になるところである。今回、関東以外の地方勢の活躍が目立ったが、経験の差が感じられないチームが良い成果をあげていたと言える。勿論、昨年も述べたが北海道の審判がポリスの笛を吹いている間は、チームの努力だけではどうにもならないのが実情である。北海道もそろそろ 1 回戦突破を実現しなければならないだろう。

技術的には、今年はまだ特徴的なものは見当たらなかった。昨年は男女ともピックアンドロールが非常に多かったが、今年はこの影を潜め、シャッフル的な全員ムーブのオフenseが目立った。ピックアンドロールはディフェンスサイドから見るとある程度プレーの先を読めることから、ディフェンスの力が増した結果、少なくなったものと推測される。

外国人選手が大活躍はしているが、そのことが勝てる理由でもなければ、負けの言い訳にもならないのが良くわかる大会であった。

(敬称略)

HBA (北海道バスケットボール協会) 指導者育成専門委員会